

樹液発電で農業支援

立命館大、宮古島で実証

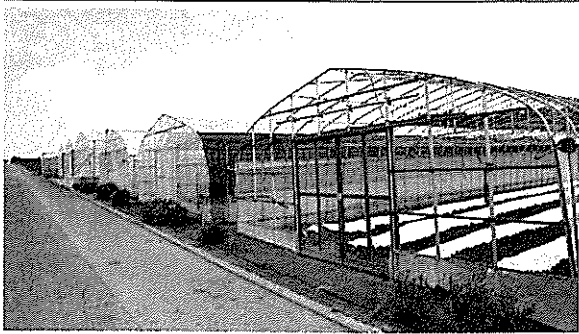
立命館大学は13日、植物内の水分と亜鉛の

化学反応を利用する樹液発電を用いた「ワイヤレス植物モニタリングセンサシステム」の実証実験を始める

植物の導管に亜鉛メッキを施した電極を刺し、導管を通る水分と亜鉛が反応して発生する微弱な電気を蓄積。一定の電力が貯まった時点でセンサー内の送信機から受信機へワイヤレス送信する。受信機隔をモニタリングすれば植物の健康状態を継続的に観察できる。

表した。期間は2024年6月まで。無電源農地が多いガーナの南国果樹に適用し、現地果樹の品質と生産性を向上し貧困農業国などの持続可能な農業を支援する。実験はガーナと気候が類似した沖縄県宮古島市で行う。

園(津市)の3社と協力して実験する。Degasの牧浦士雅最高経営責任者(CEO)は「低所得農家の所得増加に寄与し、農業の革新にもつながる」と期待を示した。



実験農場「パニパニファームキヤシステム」(立命館大提供)